

「児童の中に生きる道徳指導を求めて」

—— 教師の構えを中核とした指導 ——

足利市立北郷小学校教諭 山口 順子
教諭 中村 真一

1. はじめに

道徳教育を考えるとき、文部省指導書、第1章、第1節の中の道徳の意義をふまえなければならない。それは、「道徳教育は、道徳性の育成を目指す教育活動であるが、道徳性が人間存在の根源にかかわり、全人格的なものであるため、その育成には、指導すべき内容や方法などについて的確な認識が必要であり、また広く家庭、学校、社会のあらゆる場において、適切な指導がなされることが必要である。………」である。そして、現行学習指導要領の総則にある、道徳的実践の指導を徹底することを忘れてはならない。

しかし、現在の道徳授業を省みたとき、果たして実際にそれらが具現されているだろうか。学校現場を概観したところ、前述した基本的なことをおさえながら、たしかに指導過程も研究されておりそれが定着化し、だれもがその型に資料をのせ、授業を展開することができるようになってきているように思われる。

しかし、その反面授業が形式化しつつあり、生き生きとした授業が失われてきているように思われる。

道徳とは、本来「人間の生きざまを問い直し、見つめ、より良き道を探るもの」であると考える。その意味からすると形式化しつつある授業の中で、道徳のねらうものが果たして実現しうるであろうか。大変難かしいように思われてならない。

以上のようなことを考えたとき、道徳の授業をよりよいものとするためにはどうしたらよいのだろうか、ということが問題となった。

そこで、この問題点のすべてについて検討することをさけて、形式化されつつある授業をどのように見なおし、構築しなおすことがよいかについて、本研究を試みることにした。

2. 「道徳」授業の見直し

(1) 現在の授業の問題点

前述の通り道徳の授業は、道徳の研究の立場からみたとき、多少の差異はあるものの、その考え方においては、共通点が多いように思える。指導過程も確立し、定着化してきつつあるように思われる。

現在、本校で一番多く採用されているようである青木孝頼説の指導過程を例にとれば、後述のようにまとめられる。

導入	展開			終末	
	前段		後段		
	第1段階(自我関与)	第2段階(比較)	価値の一般化		
ねらいとする方価向値付へける。	資料を与える。 主人公などに共感させる。	異なる価値観の類型化をする。	各自の価値観の自覚を図る。	工価夫値を一般化する。図る。	まとめをする。

上記の過程の上に、どのような資料（共感資料、批判資料、範例資料、感動資料、外）を活用するかは、授業者の考え方、取り扱う価値によって異なるであろうし、導入・終末等において「生活」を話題にするか否か等のことはもちろんあると思われる。

しかし、概ね上記の表のような型で授業は進められているのが現状である。

大阪教育大教授 森岡卓也氏は、実りある授業実践のための提言として、以下のように述べている。

（指導過程を表にし、それに基づき子どもにあきられない程度に、できるだけ1つの型に絞って忠実に、しかも根気よくやってみよう。そうしているうちに、幾つかの型の特徴が分かるようになれば、今度はそれぞれの長所を生かして、更により独自な授業をするようにしよう。）

道徳の授業を自分のものとするための初步的ステップとしての提言であろうと考えられるが、道徳の授業が形がい化、マンネリ化してしまうのではなかろうか。

この提言の前半だけをただうのみにして実践してしまう先生方もいるため、現実の授業の中では型を作り、授業をねらいに向かって完全に仕上げることが最初の段階には必要なことだと考える。しかし、いつもその段階に居すわるのではなく、さらに一步踏み込んだ児童の心にしみ入る道徳授業のために、何かもう一手必要なものがあるのではないかという気持ちがしてならない。森岡卓也氏の述べている、「今度は、それぞれの長所を生かして、更により独自な授業をするようにしよう。」という点に視点をあててみたいと考える。

それは、一体何なのだろうか。森岡氏は、

「最後にどのような指導過程であっても、常に、弾力的に取り扱い、それぞれの学級の実態に即応し、指導者の特性を生かすことのできる指導過程を創造していくことが大切である。」

と付け加えているのは見逃がせないことである。

そこで、そこへ行き着くまでの過程において、何らかの手だてはないものだろうか、というのがこの研究のスタートである。

そのための基礎資料として、現状の「道徳の授業に対して児童の反応」をみてみると、京都教育大教授 村上敏治氏が以下のように言っている。要約すると、（学生にアンケートとして、小中学校で学習した道徳の授業の印象を聞くと、「忘れてしまったが、何かごたごたと話し合っただけだ。」というのが圧倒的に多いという。そして、「印象に残るものは何か。」という問い合わせに対しては、感動的な資料『橋の上のおおかみ』『ないた赤おに』『プラッドレーのせいきゅう書』『ニコラスとウェーク』『青の洞門』等、感動的な資料が間違いなく記されている。）

また、現在担任している3年生のクラスで同様の調査をしてみると、やはり、同じ様な結果がみられた。TVを見たり、様々な資料に出会ったりするのは楽しいと感じている。しかし、扱った価値内容についての反応は、割合少なく心にあまり残っていないようだった。心に残った資料も『タイヤの工夫（ダンロップ）』『マッチ売りの少女』等、偉人伝や名作であった。また、6年生でも、道徳は「TVを見るもの、話し合うもの、感想を書くもの」というイメージで、心に残った資料も『青の洞門』『銀の燭台』『野口英世』『リンクーン』等で、やはり感動的資料であった。

(2) 生きた授業となるための試案

前述したことを反省の基本にすべて、より良き授業「児童の心の中に生きる道徳指導」を目指すためには、どうしたらよいかいくつかの試案を考え実践してみた。

(a) その1. 価値（内容分析）に対する教師の姿勢

ある価値内容を取り扱うとき、指導書をよりどころとして、それを見直して価値分析は行なっている。しかし、それはあくまで指導計画なり、指導のための副読本なりに準拠した価値内容であり表面的な内容分析であったように思われる。そこで、ここでは人間のあらゆる行為を動かしている根源的な力こそ、道徳教育の中核的なねらいとして、それを大切に考えるということをもう一度再確認し、教師との関係において考えてみたい。

そのためには、教師自身がその価値に立ち向かうとき、自分はその価値をどうとらえ、どう考えるのかという、一人の人間としての価値に立ち向かう姿勢が要求されてくる。その結果、価値やねらいに対する教師の考えが前面に出てきて、人間の生きる姿は、またこの問題については、かくありたいという教師の願望や態度がはっきり示されることになる。この教師の姿勢こそが児童の心の中に、はっきりとした価値の姿として残っていくのではないかと考えた。具体的には、後述する実践例の中で示したい。

(b) その2. 説話に対する教師の姿勢

一般化、あるいは終末段階において、時には導入段階において、教師による説話が利用されている。そしてそれには、様々な逸話や、児童作文、体験談等が用いられる。それらも児童の心の中に強く残るものでなければならない。

そしてまた、資料（特に中心資料）については、前でも述べたように、児童の心の中に残っているものは感動的資料であるという。

その理由を考えてみたとき、感動的資料というものは往々にして歴史的に時代をさかのぼるものであったり、外国のものであったり、社会背景が複雑であったりすることが多い。そこで、価値に迫らせるためには、たくさんの説明を要したり、状況を理解させる必要がでてきてしまったりで、指導過程の中で時間的に無理が生じてしまい、利用されることが少なくなってしまうのが現状である。

そこで、この問題点をどのように解決するかが課題となってくるのである。その一解決方法として（身近な生活の中）から取り上げた資料をどう児童の心の中に深く入り込ませるかということが考えられると思う。その具体的方法として説話を取り上げてみた。説話を通して、児童の心の中に染み込む授業展開を考えられないだろうか。というのが仮説である。

児童の心の中に染み込む説話とは何だろうか。それは、説話の中で教師自身が、自己を語ったらどうであろうか。という提案である。教師と児童は、毎日一緒に生活しており、教師は、ひとりひとりの児童を良く理解している場合が多い。しかし、児童は教師を理解しているだろうか。日ごろの生活態度からある程度は理解していることは考えられるが、生味の人間、裸の人間となった教師の姿は知らないだろう。

「先生もやっぱり弱い所があるんだ。先生も悲しければ泣くんだ。先生も思わぬ失敗をして困るんだ。」という人間的な姿を知らせてやったらどうだろうか。児童は、教師に人間的親しみを持ち、共に苦しみ悩む人間の姿を感じることができよう。そして、問題にぶつかったとき、どう乗り越えどう打ち勝ったか知らせることにより、児童は感動し、自分自身どうしなければならないか、道を探る手立てがつかめるのではないかと考えた。

(c) その3. 価値に対する認識のさせ方

現在の道徳の授業をみていると、価値の押しつけを避けようとする教師側の意図のため、児童相互の話し合いに終始し価値の深まりや高まりに不十分さが感じられることが多い。果たして児童の力で高い位置まで引き上がることができるのだろうか。というのがこのことに対する素直な疑問であった。

ここで、アリストテレスの実践の三段論法的構造を借りて考えてみたい。

人が実践に至るまでには、大前提があり、それを小前提が受け、それらから自分なりの行動を考え決定し実践するという。具体的には大前提とは、実践規則である「正直であれ、親切であれ」ということである。小前提は、状況の認識であり「自分は現在どういう状況にあるか」「家庭はどうか」ということである。そして結論である行為の選

択決定ということになり、「やさしく親切にしてあげよう」という行為が実行されるとということになるという。

それらを私なりに解釈すれば、大前提・小前提をわきまえた上で、結論を下す。その行為が人間の生きざまであり、そこを道徳の授業が支えていると思う。従って、そこを十分に考えさせ、人間として高い行為ができるようにさせるには、大前提・小前提を十分認識し、「知る」ということから始まるように思われる。「知る」ということは、「生きる」ということに深くかかわり合っているように思う。

そこで、これらの考え方を小学校の「道徳」の授業に当てはめてみると、大前提である実践規則「正直であれ」「親切であれ」ということは、十分知る必要があり、しいては十分知らせ教える必要があると考える。このことが1つの提案である。ただ児童相互の話し合いのみを重視するのではなく、児童が話し合い考えあぐねているときは、教師としては「かくあれ」ということは、はっきり教えてやる必要があると考えるのである。まして、小学校の低学年における授業においては、このことはさらに顕著であってよいのではないかと考える。

3. 実 践 例

(1) 主題名 ドッジボール (信頼 友情)

(2) 主題設定の理由

ねらいとする価値

人間関係の基本となるものは相互信頼であり、望ましい集団生活をするためには、人間相互の信頼と友情が必要である。従って、友人関係においても仲よく助け合い励まし合うと同時に、互いに忠告し合って向上するといった真の友情がなければならない。

そして、その真の友情とは、相手を思いやる温かい心に対する信頼感によって成立する。

(3) ね ら い

お互いに助け合ったりして、友情を深めていこうとする心情を養う。

(4) 授業の観点

教師の体験談を通して、価値に対する方向づけ、授業に対する意欲づけを図ったが適切であったか。

(5) 資料について (文部省 資料Ⅲ-3-14 一部改作 読み物)

「ドッジボールがへたなやすおくんは、みんなから馬鹿にされるのがいやなばかりに、本当は仲間に入りたくても入れずにいる。そして、いつも仲よしでドッジボールの得意なたけしくんが誘ってくれるが、にえきらないやすおくんに腹を立ててしまう。」

という話である。

児童は、たけしくんが誘ってくれたのにぐずぐずしているやすおくんが悪いととらえると思う。しかし、本当はやすおくんもやりたかったのだという気持ちや、たけしくんまでに仲間はずれにされたやすおくんの悲しい気持ちを理解できる資料もある。

そこで、やすおの気持ちを深く掘り起こすことを通して、相手の気持ちになって温かい思いやりをかけることが大切なことに気づかせたい。

(6) 本時における同和教育の視点

やすおのぐずぐずしている態度のうらには、みんなが馬鹿にしたことや、どうにもならない運動の不得意さがあることに気づかせ、相手の立場を十分理解し、思いやる心情を育てたい。

(7) 展 開

◎ 同和教育との関連

	学習活動	時間	予想される児童の反応	指導上の留意点
導入	1. 友情の大切さを担任の小学生時代の体験談によって知る。	10	<ul style="list-style-type: none"> • 友だちっていいな。 • 先生、よかったです。 • なるほどなあ。 • 本当かなあ。 	<ul style="list-style-type: none"> • 本時のねらいに類似した事象を共感的にとらえさせるため、教師の体験を具体的に話す。
展	2. 資料「ドッジボール」を黙読する。 3. 感想を発表する。 。この話を読んでどう思いましたか。 。やすお君について 。たけし君について 4. やすお君の気持ちを考え、たけし君はどうすればよいか考える。 。たけし君はどうすればよいでしょうか。	5	<ul style="list-style-type: none"> • たけし君は悪い。 • たけし君は仲間に入れてやればよかった。 • どっちも悪い。 • やすお君はいっしょにやればよかった。 • やすお君は弱むした。 	<ul style="list-style-type: none"> • やすお君とたけし君の気持ちや行動について考えながら読むことを指示する。 • 気持ちや行動を顔の絵を使って確認させる。 • 座席表※印の子は、あらすじがよくわからないと思うのでそばにいて指導する。 <p>◎だれの発表も最後までしっかりと聞かせる。</p>
開	5. 自分の考えをメモする。 。やすお君へたけし君の立場に立った手紙を書いてやろう。	10	<ul style="list-style-type: none"> • むりやりにでも引っぱっていく。 • もう一度さそう。 • 何度もさそう。 • もんくを言わないやくそくをしてつれていく。 • あたらないように守ってやる。 	<ul style="list-style-type: none"> • 性格の同じような子どもを集め、グループで話し合いをさせる。 • たけし君の最後の言葉は悪いことであることを全員におさえさせる。 • やすお君の立場に同情させ、たけし君の態度に目をむけさせる。 <p>◎相手の気持ちを考えた内容がやすお君への手紙をとおして書けるようにする。</p>
	6. 教師の話を聞く。	5		<ul style="list-style-type: none"> • 女の子の立場からの友情を話してやる。

(8) 評価

一人ひとりの児童が、共感的に友情（信頼）の大切さがわかったか。

4. 授業に対する考察

(1) 値値についての基本的な考え方

主価値、「信頼友情」は指導書によると次のようになる。

互いに信頼し合い、仲よく助け合う。（低学年においては、友達と仲よく助け合い励まし合うことを、中学年においては、更に互いに忠告し合うことを加え、高学年においては、人を信頼し、人の信頼を裏切らないことを主な内容とする。）

又、『道徳の時間の指導内容の分析』 宇都宮市立雀宮中央小学校

宇都宮市立雀宮東 小学校

宇都宮市立雀宮南 小学校

では、

「信頼」 信じて頼りとすること、信用してまかせること、「友情」 友達の間の情愛、友人としての親しい交わり、友のよしみ、好意をよせ合い、頼り合う間柄、それをささえる心である。したがって、友情は相互の信頼関係のうえに成り立つものである。

「励まし合う」 同病相あわれむといった安心感を求める友情では、互いに退歩し、向上は期待できない。そこで、互いに手をつないで向上していこうという気持ちによる友人関係が大切である。そのためには、自分の向上を願うような相互の信頼感（真の友情）を育てる必要がある。

「忠告し合う」 相手の非を戒める場合、相手の心境を窮地に追い込むような忠告の仕方でなくて、対等の立場に徹した気持ちでの忠告の仕方と、それに対して、素直な聞き方を指導することが大切である。

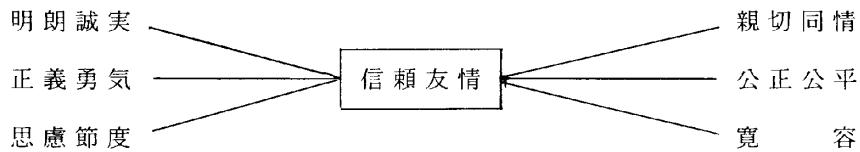
◦ 内容についての解説

人間関係の基本となるのは、相互信頼である。相互信頼なしでは、人間社会は成立しない。顔と顔とをつき合わせ、毎日を送る人々の間は、信用信頼関係において成り立っている。これらは、生活の行動のいわば心の支えである。また、抽象的な信頼ではなく具体的な行動において利害や打算のない援助や協力が大切である。

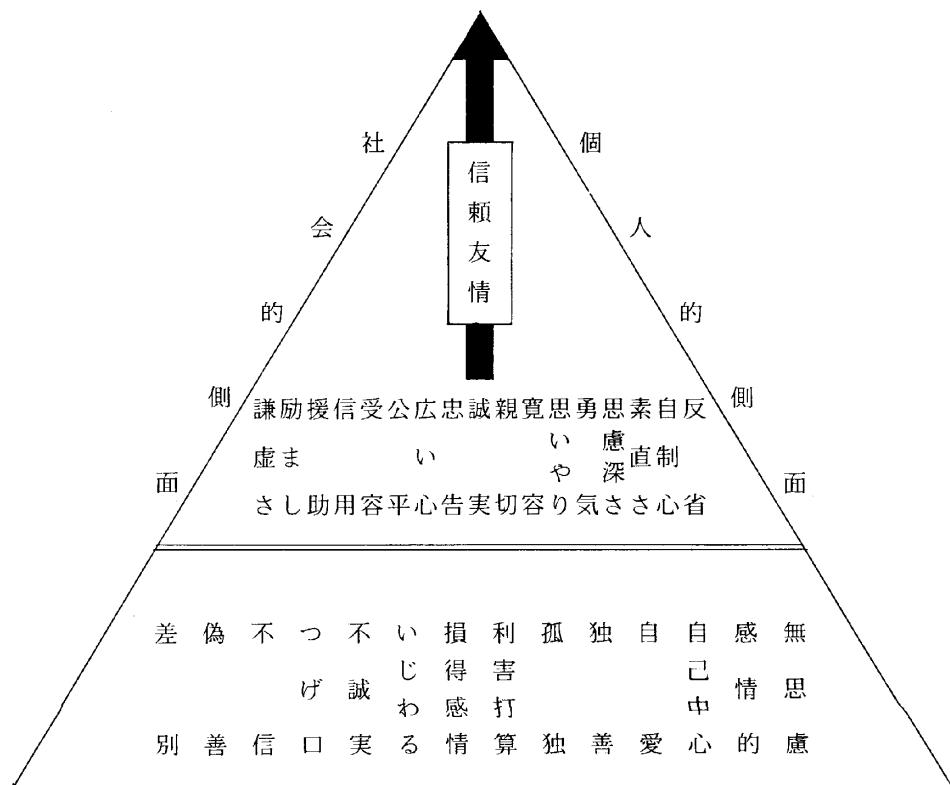
したがって、友人関係にあっても、同病相あわれむといった友情ではなく、仲よく助け合い励まし合い、また、忠告し合って、お互いが向上するような真の友情でなくてはならない。また、友人以外の関係でも、人格尊重の精神を基盤にし、常に誠実な心をもって交わるならば、相互信頼と友情は確立される。

したがって、この項目は、望ましい集団生活をするためには、人間相互の信頼と友情が必要であるということをねらっている。お互いに信頼し合い、平和で豊かな社会の実現を期待しているにもかかわらず、現実は、なんと不信と欺まんに満ちていることか、それだけに、正しい意味での信頼・友情はますます重要視される。

。他の項目との関連



。内容の構造図



さて、以上のように定義づけられる信頼・友情を、教師として、どうとらえるかということが、私達の課題の一つとなった。

そこで、まずこの価値に対する、児童の実態をみることの必要性を感じ、事前調査（略）を実施し、また教師の観察を合わせて行った結果、次のことが明確になった。

北小第3学年児童 男子81名、女子80名の調査観察の結果

- 自己主張が強く、なかなか相手の気持ちが察せられない。
- 自分に合わない友達とは遊ぼうとしない。
- 仲間はずれは、割合行うが、されるのはいやだ。
- 自分の欠点には、なかなか気付かず、他人から言われても、なかなか直せない。
- こと他人の問題に対しては、割合寛容であるが、自分が介入すると寛大な気持ちは持ちにくい。

北小の3年児童の実態からみたとき、「信頼」「友情」の主価値を、どのような資料によって深めさせることが、効果的かを学年全員で検討した。

その結果、資料として「ドッヂボール」が適当ではないかと考え、一部を本校児童の実態に即して、改作し使用することとした。

ドッヂボール

やすお君は、からだがよわいせいか、休み時間になると、みんなでするドッヂボールにいつもまぎらす、教室でひとりぐずぐずしています。

きょうも、やすお君は、みんなが元気よく教室から出していくのを見ながら、
——少し、気持ちが悪いから、教室にいようかな。
と、思っていました。

そこへ、いつも仲のよいたけし君たち3人が、わざれたボールを取りにもどってきました。ひとりでいるやすお君に気がついて、

「やすお君、きょうも外に出ないの。」
と聞きました。やすお君は、小さな声でこたえました。

「うん。………ぼくちょっと気持ちが悪いんだよ。」

たけし君は、こまった顔をして、

「やすお君は、ドッヂボールのときになるといつも病気になるんだね。」
と、いいました。

「だって、ほんとうなんだよ。」

「少しごらい、気もちの悪いのなんか、ドッヂボールをやっているうちに、なおっちゃんよ。」

やすお君は、下をむいてしまいました。しばらくだまっていましたが、それからひとりごとのように、

「ほんとは、やりたいんだけど、みんながぼくのこと、へただのためだのっていうからいやなんだよ。」

といいました。

「なんだそうか。やすお君、元気出せよ。ドッヂボールなんか、やっているうちに、すぐうまくなるよ。さあ、出よう。」

たけし君がそういうても、やすお君は下をむいたままでした。たけし君は、だんだんいろいろしてきて、

「もういいよ。さあ、みんなこうぜ。まったくやんなっちゃうよ。こんど『いれてっ。』といってもいれないからな。」

そういうって外に出ていきました。

やすお君の目からは、なみだがこぼれできました。

(文部省指導資料3集3-4より)

そこで、なぜ資料「ドッヂボール」をとりあげたかを、資料を通しながら、その考えを述べてみる。

本資料においては、やすおにも、問題がある。たけしが誘ってくれるのに、ぐずぐずと、なかなか煮え切らないでいる。現実の児童をみたときも、この様な児童や場面は多々みられる。決断力のない子、ぼんやりしている子、引っ込み思案な子、これらの児童のまわりには絶えず問題が起こっている。

したがって、これらの場面は、児童の経験の範囲であり、だれでも自分のものとして実感できるのではないかと考え、「互いに忠告し合う。そして、それを素直に聞き入れて向上していく。」というところにスポットをあてて、授業を組み立てることが効果的であると考えた。

そして、指導を実践するとき、どう児童に与えるかが研究の中心となった。その結果、これを私達教師自身にあてはめて考えてみるとこれが大切ではないかということになった。教師自身、やすおの様な心がないだろうか。恥ずかしい、なかなか思い切って入っていけない、上手にやってのけたいのに、なかなかうまくいかない。どうにもならないでいる自分など、果して自分にはないだろうか、ということが話し合われた。そして、教師自身そうしたくてもできないでいる自分にぶち当たることが、しばしばあることが確認された。これは、どうにもならない人間の業のようにも思われてきた。それらをふまえて、この資料のやすおをもう一度見直してみたとき、やすおに対する対応のしかたはとても残酷なことのように思えてきた。最初に考えを「やすおにも問題がある」というとらえ方をもう一度検討し直す必要がでてきた。どこに救いがあり、どこに信頼・友情の深まる要素が隠されているのか、探ってみる作業が再度試みられた。

その結果、この問題点はやすおではなく、たけしにおくことが妥当ではないかということになった。たけしがやすおを誘ったとき、ただ誘っただけではなく本当の思いやりを持って、やすおに対して何ができるかと考えることが大切ではないかということである。やすおは、本当はみんなと一緒にドッヂボールがしたい、でも、へたでできないでいる。そこで、たけしがやすおのその気持ちを察し、その状況から救ってやること、それが大切だと考えられてきた。そうすることによって、やすおはたけしに対し絶対的な信頼感を持ち、

二人の間に友情が生まれてくるのではないだろうか。たけしがやすおを救う方法は、それまた様々考えられると思う。例えば、ドッヂボールがうまくなるよう教えてやることもできるだろうし、この場では、他の友達に声をかけてやること、やすおをカバーしながらゲームをすること、などまだまだあると思われる。

したがって、この資料を使って、主価値を教師自身どうふまえ授業をするかということは、重要なことであると考え、次のように確認しあった。

やすおの気持ちを本当に深く掘り下げ痛みを理解する。そして、そこから温い思いやりを持って接しなければならないことに気づき、やがては本当の信頼関係が生まれ、高い友情が培われるのだ。このことは、問題は弱いもの、自己主張のできない側にあるのではなく、強い立場にあるものの他を思いやる心、お互い支えあう心を十分に伸ばしてやる、が、主価値を培う重要な課題である。

(2) 説話について

説話も教師自身の「己を語る」姿勢を貫き、それを児童にぶつけることが大切であると考えたので、教師の小学校時代の実話を話すこととした。そのために、実話であるということ、その時の臨場感を持たせること、という2点を重視して次のことに留意した。

・教師の第3学年の通信票を用意し、その必要事項のところを指導上必要と考えている児童に直接読ませ、事実であるということを確認させた。

説話内容は以下の通りである。

() 内は児童の声や表情

これは、先生の小学校3年の時の通信票です。（ワ－。見せて、見せて。興味を示してのりだす。）ここには身長や体重も書いてあります。A君に読んでもらいます。「身長が、118.8cm、体重が、18.6Kg。」みんなどうだい。（小さいね。今そんなでもないよ。）先生は子供のころ小さかったんだよ。

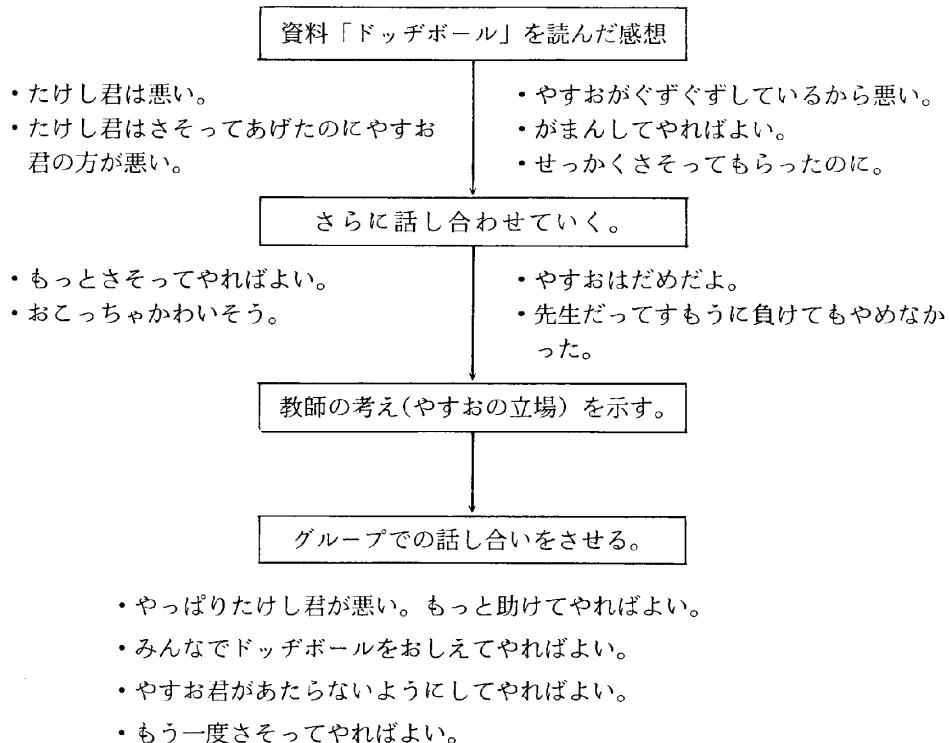
それで、先生の小さいころの話をします。先生の小さいころは、遊びで相撲がはやっていたんだよ。くる日もくる日も相撲ばかりやっていたんだよ。先生ももちろんやつてた。ところが先生は、さっき言ったとおり小さかったから負けてばかり。

そしたら、ある日だれかがこんなことを決めたんだ。「負けた人はずっとやる。勝った人がかわるようにしよう。」すると先生は一番弱かったから何べんやっても負けて、いつんなっても変わってもらえないんだ。先生は悲しかったね。ところが、そんなとき、体も大きくて相撲も強いKちゃんっていう子がね。わざと負けてくれたんだ。先生は泣くはどうれしかったね。投げとばされちゃ負けて、やめられないでいるとき、助けてくれたんだもん。（シーンとしてだれ一人口を開く子はいなかった。）

そしてそれから、Kちゃんとは仲よしになって、Kちゃんのおかげでいろいろ運動するようになって、運動が好きになったんだよ。

(3) 儲値に対する認識のさせ方

授業における児童の反応は次のようにであった。



やはり当初予想していたとおり、児童はやすおが悪いという反応を示す児童が多くみられた。そこで、思考を深めさせる中で何人か、やすおの気持ちを考えるうちに、たけしがもう少し思いやりをかけるべきだという者もでてきた。こうした価値葛藤をさせるうちに、どちらにして良いか考えあぐねる児童もみられてきた。そこで教師は、「先生は、やすお君の気持ちがわかる。たけし君が悪いと思う。」と、教師の考えを前面に出して資料についてのまとめを行った。

5. おわりに

この試案の授業を校内の教師にも参観してもらい以下のような感想がかえってきた。

- 教師の体験談、これは聞いている児童ばかりではなく参観している教師も心打たれた。
- 授業の最初には、勝手なことを言っていた児童も教師自身の説話になったら、しんとして聞き入っていた。やはり心打たれ、授業に全員入っていったようだ。
- 値値に対するとらえ方として、やすおではなくたけしが悪いというとらえ方は、今までとはちがうという感じだった。
- やすおの行動も反省させる必要があるのではないか。
- 値値に対する抑えをしたのはきちんとして良かった。

。価値について教師が決めつけるのはよいか。

この研究のスタートが、指導過程が形式化しマンネリ化している恐れがある、児童が生き生きと「道徳」の授業にとりくめない、という問題点から、その原因として、資料の問題、発問の問題等いろいろ検討してきた。しかし、その一方で教師自身が「己を語り」「児童の中に生きて」いる授業はどうなのか、という仮説をつくりあげたことから出発した。

研究に入ってみると、児童の実態、主価値の考え方、「己を語る」「児童の中に生きる」ということが、どれ程勇気のある作業であるかがわかつてきた。そして、その勇気こそが児童の心をつかみ、児童が授業に熱中することの大きな原因であることもわかつってきた。さらに、「道徳」とは何かということから「児童観」「人間観」の変容までをせまられる結果となつた。

この研究は、今後さらに継続していかなければならないところばかりである。しかし、一つの区切りとして今までの実践をふり返る意味でまとめてみることも必要であると考え、まとめてみたものである。

評

道徳授業のマンネリ化が言われて久しい。その原因の一つに指導過程のマンネリ化があげられています。一方、子供達の目の輝いている授業も見られます。教師の創意ある授業の場合あります。

この実践記録は、こうした実践上の問題に焦点づけて、生き生きした授業が失われていることを反省し、「児童の中に生きる道徳指導」をどう構築しなおすかの一つの試みとしての研究であります。こうした面に苦悩する教師の姿に感動しました。

記録に、「教師の説話を聞き入っていた」と書かれています。教師自身が自分の心を開き児童に語りかけ、人としての生き方を共に求める姿、それは、ありのままの人間性に着目し、理解を深める姿であります。こうした指導過程の改善研究は、道徳授業の形がい化からの脱皮でもあり、道徳の時間の活性化の一つの方途でもあります。その意味で、この実践は、道徳指導上、大きな示唆を示してくれました。

子供達の心をゆさぶり、情熱をもって指導にあたると、生き生きとして児童の中に生きる道徳指導になるのだと思います。